



もう一人の「きょうだい」

坂井市立坂井中学校 3年 高崎 千実

ムチェ・テメスゲン。私のもう一人の「きょうだい」は、エチオピアに住む14歳の男の子です。彼を初めて目にしたのは、小学3年生の春、父が私たちに見せた写真には、ところどころに穴のあいたぼろぼろの服を着ている男の子が写っていました。

「誰？この人。」

妹の素朴な質問に、父はこう答えました。

「その子は、これからお父さんが支援する子や。お父さんが毎月ちょっとずつやけどお金を送ったら、その子は学校に行けるようになるんや。」

父が参加したのは、世界中の恵まれない子どもたちへ経済的な援助をするNPO団体です。父はスポンサーとして、対象者である彼に毎月数千円のお金を寄付します。その寄付によって彼とその家族は暮らしを向上させることができるのです。

海のずっと向うに、自分たちとつながっている人がある。私の胸は高鳴りました。まだ会ったこともない、見た目も似ても似つかない彼にまるで本当のきょうだいのような親近感が湧いてきました。

支援を始めて数か月、彼から初めての近況報告の手紙が届きました。そこには、彼が援助を受けてできるようになったことがずらりと書かれていました。きれいな水が確保できるようになった、診療所が利用できるようになった、職業研修を受けた、感染症の予防接種を受けられた。私たちにとっての「当たり前」、でも、彼らにとってはとても大切な「できた」。たくさんの「できた」を見て、心があたたかくなりました。さらに、手紙には彼の将来の夢も書かれていました。それは、サッカー選手になること。添えてあった写真には、真新しい青のユニフォームに身を包みびかびかのボールを抱えた彼が写っていました。仲間といっしょに笑っている彼の顔は、最初に目にしたときより何倍も輝いて見えました。

世界中には、学校に通えない子ども、食料難に苦しむ人々、感染症で命を落としてしまう赤ちゃんなど、私達にとって「当たり前」な生活すら送れない人がたくさんいます。私たちは彼らに何をしてあげられるでしょうか。金銭的な支援ももちろん必要ですが、いちばん大切なのは、彼らに寄り添うことだと思います。「遠い国でのできごと」「私たちには関係ない」と突き離さず、より多くの人々が飢餓や貧困に苦しむ人たちを理解してあげること。それが、世界をより豊かにするための第一歩だと思います。

ムチェ・テメスゲン君との交流が始まってもう5年以上が経ちました。いつか、家族みんなで、サッカーのエチオピア代表になった「もう一人のきょうだい」の試合を観ることが、私の夢です。